

- 9) Ardhmāgadhī Dictionary (ed. by Ratnacandrajī, reprint, Tokyo 1977), Monier's "Sanskrit-English Dictionary" etc.
- 10) Śrīmad-Aupapātikasūtram p. 95
ekārthā vā dyutyādayaḥ śabdāḥ prakāśaprakarṣa-pratipādanaparās ceti na paunaruktyam
- 11) Tattvārthādhigamasūtram, pt. 1 with Siddhasenagaṇi's ṭīkā, Ed. by Hirālāl Rasikdās Kāpadiā, Sheth Devchand Lalbhai Jain Pustakodhar Fund Series 76 Surat 1930, p. 274
iha ca dravyaleśyā—śarīravarṇaḥ pratiniyamate
- 12) rattābha'tti lohitavarṇaḥ "paumapamahgora" tti kamalagarbhakāntā pitā ity arthaḥ, "seya" tti śuklāḥ trivarṇā eva vaimānikā bhavanti.
- 13) 拙稿『Padmaleśyā—その語源解釈について—』印仏研第25巻第2号 p. 69 ff.
- 14) Bhagavatisūtram, Ed. by N. V. Vaidya, pañcadaśam gośālākhyam śatakam, Shri Vijayadevsur Sangh Series No. 9, Bombay 1954, p. 10, l. 14f.
- 15) Bhagavatisūtram p. 11 l. 1
je ṇam gosālā, egāe saṇahāe kummāsapiṇḍiyae egeṇa ya viya ḍasaṇam chaṭṭhamchaṭṭheṇam
aṇikkhitteṇam tavokammeṇam uddham bahāo pagijjiya 2, jāva viharai, se ṇam aṃto chaṇham
māsāṇam samkhittaviulateyaesse bhavai/
- 16) sū° 547 (p. 16 l. 24), sū° 548 (p. 18 l. 3) sū° 553 (p. 23, 24, 25), sū° 554 (p. 27 l. 8, p. 28 l. 18), sū° 555 (p. 31 l. 18) sū° 558 (p. 36 l. 25) etc.
- 17) Jozef Deleu, op. cit., p. 218
A. L. Basham, History and Doctrines of the Ājivikas, London 1951 p. 62
- 18) 原実「古典インドの苦行」春秋社, 1979, p. 113 引用
- 19) 同上書 p. 127 引用
- 20) Bhagavatisūtram sū° 553 p. 23 l. 15 f.
- 21) Aṅgasuttāni II, ed. by Ācārya Tulasi, Ladnun V. S. 2031, Bhagavati 7-10. sū° 230 (p. 314)
- 22) W. Schubring は, teyalessā は厳密にいうと誤って teya の同義語として用いられていると説明するが, 両者の関係については言及しない。[ZDMG 104 (1954) Bücherbesprechungen (A. L. Basham, History and Doctrines of the Ājivikas) p. 258
- 23) M. L. Baṇṭhiā, op. cit., p. 49-52. p. 257 f.
- 24) L. Alsdorf, The Āryā Stanzas of the Uttarajjhāyā, Wiesbaden 1966 p. 214 ff.
W. Schubring, The Doctrine of the Jainas, § 97, A. L. Basham, op. cit. p. 245.
- 25) Uttarādhyaṇasūtra, ed. by J. Charpentier, Upsala 1922, p. 241
- 26) L. Alsdorf, op. cit., p. 214 ff.
- 27) Nathmal Tatia, Leśyā-Kośa, Foreword, p. 22

V章で再考された。第IV章は、特殊な破壊能力 *tejoleśyā* を扱った。これは、*tejas* と同義であり、「光輝」を意味することは簡単に導き出された。第V章の業論に関する *Leśyā* も、「光輝」の性格を持っていることは明らかである。従って、術語の *Leśyā* は、普通名詞で光輝を表わす *leśyā* に由来することに疑問の余地はなくなる。

また、これら4章で考察した *leśyā* は、いずれも「光輝」を表わす *ujjovemti* 以下の4語あるいは2語の動詞と連合し、この事実だけからも、あらゆる *leśyā* には「光輝」の意味が包含されることが明らかである。

以上のような結論から、*leśyā* の語源について考察する時、従来、注釈者や諸学者が試みてきたように、業論に結びつけて説明することは不合理であろう。むしろ、「光輝」を意味する普通名詞 *leśyā* として、その語源を求めるのが適当であるのは自明である。このように考えると、*leśyā* の語源を $\sqrt{\text{śliṣ}}$ に求めた Nathmal Tatia 教授の卓見²⁷⁾が最も正鵠を射ているようである。 $\sqrt{\text{śliṣ}}$ は “to burn” を意味し、それが「ある色に輝く (shining in some “colour”)」と解釈されて、その名詞形が *leśyā* であると彼は考えるのである。(文明学科専任講師)

注

- 1) W. Schubring, *The Doctrine of the Jainas*, Eng. tr. Delhi 1962 §. 97, p. 197 note 3
H. Jacobi, *Jainasūtras* pt. 2, SBE 45, p. 196 note 2
M. L. Bāmṭhiā, *Leśyā-Kośa*, Calutta 1966 p. 1
- 2) Jozef Deleu, *Viyāhapannatti*, Brugge 1970 p. 46
- 3) *Sūryaprajñaptiyupāṅgam*, Āgamodayasamiti, Mehesana 1919
- 4) Malayagiri の注釈 (*vivarāṇa*) に従うと次のように解釈される。人間界の外では太陽は複数存在し、各々10万ヨージアナの距離を隔てて一列に並んでいる。月も同様に並んでいる。太陽と月の関係は、一個の太陽は二個の月の中間地点、すなわち、両隣の月から等しく5万ヨージアナの地点に存在する。そのために、“*tataś candraprabhāsammīśrāḥ sūryaprabhāḥ sūryaprabhāsammīśrās candraprabhāḥ*” 「ゆえに、(太陽と月の中間では)太陽の光輝は月光に混じり、月光は太陽の光輝に混じる」と説明される。これが、「中間は様々に混った光をした」を意味する *cittamṭaralesa* (*citrāntaraleśya*) の内容である。
尚、この個所と同一文脈が *Jivājivabhiḡamasutta* sū° 179 に対する Malayagiri の注釈中に引用される。
- 5) *Sūr.* § 20
tā jayā ṇaṃ ete paṇṇarasa kaśiṇā 2 poggalā sadā caṃdassa vā sūrassa vā lesāṇubaddhacāriṇo bhavaṃti tatā māṇusaloyaṃsi māṇusā evaṃ vadaṃti—evaṃ khalu rāhū caṃdam vā sūraṃ vā geṇḥati,
- 6) *Samavāyāṅgasūtram*, ed. by Maphatlal Jhaverchand, Ahmedabad 1938
- 7) *Srīmad-Aupapātikasūtram*, with Abhayadeva’svṛtti, ed. by Paṇḍita Bhulālāl Kālidās, Badami, vi° saṃ° 1994 sū° 22 p. 94 ff cf. *Paṇṇavaṇāsutta* (ed. by Muni Puṇyavijaya, Jaina-Āgama-Series No. 9 pt. 1, Bombay 1969) 2-177, 188, 195, 196
尚、*Jiv. sū°116* に対する Malayagiri 注の中に、同一文脈が引用されている。
- 8) Badami 版では *jutti* とあり、これは *skt. yukti* と解されるべきである。しかし、これを認めるのは Abhayadeva のみである。しかも、彼も *dyuti* という解釈を同時に認めている。この個所について、E. Leumann の校訂本 (*Das Aupapātikasūtra*, *Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes* VIII-2, Leipzig 1883, (Reprint 1966) § 33 は、“*juie*”を採用する。同じ文脈が現われる *Paṇṇavaṇāsutta* 2-188 でも “*jutie*” が採用されている。従って *juie* (*skt. dyutyā*) が正しい形と考えられる。

この章が韻律の考察によって、古層と新層に区別されることを明らかにした²⁶⁾。それに従うとこの詩節は古層に属する。この事實は、Leśyā は、古くは、karmaleśyā として表示される必要があったことを十分予想させる。これは当該の leśyā が業論と関連したものであることを明示し、他の Leśyā の語法とは異っていることを示すためであったに相違ない。元来、leśyā が、業論と関連した leśyā を意味したとするならば、改めて karmaleśyā と表示する必要は全くないのである。この Leśyā 説が煩雑な体系に整理されると共に、その圧倒的な頻度からも、もはや、leśyā は、普通名詞 leśyā よりも、この特殊な術語 leśyā をもって代表されたと考えても不思議ではない。これこそが、上述のように注釈者や現代の諸学者が leśyā の語源を考える時、術語 Leśyā の側面からしか考慮しないという弊害を生みだした原因ではなからうか。

Leśyā が「光輝」を表わす普通名詞 leśyā の一語法に過ぎないと考えた根拠は、上述の leśyā と karmaleśyā の対比であったが、他にもこれを証明する証拠が存在する。

本稿第三章の「身体の色」の考察の最後に、「神々の身体の色」と Leśyā に共通するものが「光輝」であることを明らかにし、さらに(神々の)身体の色と Leśyā が対応関係にあり、pamhalessā のように身体の色から Leśyā の名称が決定された可能性を示唆した。このような状況の下で、Leśyā も「光輝」と密接な関係にあることが予想されていた。Leśyā は色によって表示される。既述のごとく身体の色は「光輝」によって表わされる場合が多かった。

Utt. 第34章第4詩節から第9詩節までは6種の Leśyā の色を類例をもって説明している。たとえば、第4詩節と第5詩節は次のように述べられる。

jīmūyaniddhasaṃkāśā gavalaritṭhagasannibhā/kahaṃjaṇanayaṇanibhā kiṇhalesā vaṇṇao //4//

「色について、kiṇhalesā (黒色の Leśyā) は、雨雲、牛の角、ariṣṭa の実、鶉鳩の目に似ている。//4//

nilāsoḡasaṃkāśā cāsapicchasamappabhā/veruliyāniddhasaṃkāśā nilalesā u vaṇṇao//5//

「色について、nilalesā (青色の Leśyā) は、青い無憂樹、cāsa (鳥の名前) の尾、つややかな瑠璃に似ている。//5//

残りの4詩節を含めた6詩節すべてにおいて、類似を表わす語として saṃkāśa (saṃkāśa), sannibhā (saṃnibhā), nibha (nibha), samappabha (samaprabha) が用いられている。いずれも√kāś, √bhā という「光輝」を表わす動詞の派生語からなる。特に、samaprabha は「光輝を同じくする」という意味の複合語であり、より直接的に「光輝」との関連を示している。

これらの色を説明した6偈は、Alsdorf 教授の考察によると、この章では古層に属している。これは、その後に説明されている味(rasa)、芳香(gandha)、触感(sparśa)等が新層に属するのは、明らかな対照を示し、Leśyā が元来、色と関係が深かったことを示唆している。また、この色は、既に考察したように「光輝」に結びつくものであった。

もはや、leśyā 説の術語 Leśyā も、「光輝」と深く関連し、それを表わす普通名詞 leśyā が業論に関して特殊な語法として用いられたのに他ならなかったことの疑問の余地はなくなる。

VI 結 論

以上のように leśyā の語義を4章に分けて考察してきた。第二章の天体 leśyā は、もっとも自然な「光輝」を意味する。第三章では、神々のもつ「身体の色」leśyā を考察した。これもやはり「光輝」に他ならなかった。更に、神々の身体の色が、第五章で扱われる Leśyā と対応関係を持ち、両者の間に深い関係が認められた。しかもその共通項は「光輝」に他ならないことが第

V

さて最後に *leśyā* 説の術語として用いられる *Leśyā* の考察に移る。既に1章で言及したが、普通、*leśyā* といえ、この項瑣な教義体系に確立された *Leśyā* を指す。事実前章までに考察してきた *leśyā* と比べて、圧倒的な出現頻度は、このような実状の止むを得ないことを充分納得させるに足る。*leśyā* の用例を集大成した *Lesyakosa*²³⁾ においても、前章までの *leśyā* の一般的な語法は、*Leśyā* の例外的な用例と考えられている程である。*leśyā* の語源の考察でも主にこの業論に関連した *Leśyā* の側面から検討されることは既に述べた通りである。しかし、普通名詞 *leśyā* が術語 *Leśyā* の例外的な用例と考えられるより、普通名詞 *leśyā* から特殊な術語 *Leśyā* が導かれたと考える方が合理的であることは自明であろう。ここに、普通名詞 *leśyā* と術語 *Leśyā* の関係を検討する必要がある。

この問題を解く鍵は、*kammalessā* なる語に見出される。通例、単に *leśyā* と表示されるこの *Leśyā* は、稀ではあるが、*kammalessā* (skt. *karmaleśyā*) と表わされる場合がある。*Leśyā* は、他教派の教義を借用し、耆那教の業論の潤色を受けて確立した教義であることは、既に多くの学者が指摘する所である²⁴⁾。*Leśyā* が、業を意味する *kamma* という語との複合語で表わされるのは、この見解を参照すれば、普通名詞 *Leśyā* なる語の業論と関連した用例であることを明らかにするためであるとの仮定が成立する。これは事例に則して確証されねばならない。

数少ない *kammalessā* という表示の一例は、*Viy.* 第14章第9節に現われる。ここでは、*karmaleśyā* 自体を見たり、知ったりすることはできないが、形(身体)と *karmaleśyā* を伴った靈魂(*jīva*)を知覚することができると思われる。

さらに、

jāo imāo caṃdimasūriyāṇaṃ devāṇaṃ vimāṇehiṃto lessāo bahiyā abhinissaḍḍāo tāo obhāseṃti pabhāseṃti evaṃ eeṇaṃ goyamā ! te sarūvī sakammalessā poggalā obhāseṃti
4//

「月や太陽等の神々の住処(天体)から外に向って光輝(skt. *leśyā*)が放射されている間それが輝いているのと同じように、形態と *karmaleśyā* を伴った物質(skt. *pudgala*)は輝く。」と述べられる。

ここでは、天体等についていわれる *leśyā* と *karmaleśyā* が対比されている。*leśyā* にみられた *obhāseṃti* 以下「光輝」を表わす四動詞との連合が *karmaleśyā* についても認められる。*karmaleśyā* は、それを伴うことによって物質が輝くのであり、自ら輝くというよりも「光輝」の原因である。この点が、一方の天体についての「光輝」としての *leśyā* と異なる所である。他方、前章 *tejoleśyā* の *Viy.* 第7章の例とは同じである。しかし、明確に、天体の *leśyā* 「光輝」をその喩例として挙げており、*karmaleśyā* が *leśyā* と同種のものと考えられていることは疑いえない。したがって、*karmaleśyā* は「光輝」を表わす *leśyā* の特殊な一用例に他ならないことは明白である。このように上述の仮定は確実度を増すことになる。

また、*Utt.* 第34章の冒頭詩節は次のように述べられる。

lesajjhayaṇaṃ pavakkhāmi āṇupuvviṃ jahakkamaṃ/ (25)
chaṇhaṃ pi kammalesāṇaṃ aṇubhāve suṇeha me //1//

「順序通りに、順次、*leśyā* 章を私は述べる。6種の *karmaleśyā* についての教えを私から聞かれよ。」

ここでは、*leśyā* と *karmaleśyā* の両語がみられる。*Utt.* 第34章を研究した *Alsdorf* 教授は、

よって *tejas* が現われ、それは精神的熱力である *tapas* の具体的顕現である。以上から次のように述べられる。

「ここに *tejas* は内的・精神的 *tapas* の外的顕現に他ならず、斯くて吾々は *kopa* (忿怒), *tejas*, *tapas* が並列して現われる用例に遭遇する。¹⁹⁾」

以上の原論文の主旨は、本章の *teyalessā*, *teya*, *tava* に完全に適合することが知られる。当該のテキストにも *tapas* と *tejas* が並列的に用いられることは既に考察した通りである。

上述の例で明らかのように、*Gosāla* に *teyalessā* が放たれたのは、苦行者 *Vesiyāyana* が怒った (*āsurutta*, skt. *āsuruṣṭa*) 時であった。また、*Gosāla* が *Mahāvira* の弟子 *Savvāṇubhūi* (*Sarvānubhūti*) を滅した時は次のように述べられる²⁰⁾。

tae ṇaṃ se gosāle maṃkhaliputte savvāṇubhūiṇāmaṃ aṇagāreṇaṃ evaṃ vutte samāṇe āsurutte 5 savvāṇubhūiṃ aṇagāraṃ taveṇaṃ teenāṃ egāhaccaṃ kūḍāhaccaṃ bhāsa-rāsiṃ karei

「そして、かの *Gosāla Maṃkhaliputta* は、*Savvāṇubhūi* なる名前の出家にこのように言われて怒り、*Savvāṇubhūi* なる出家に、苦行力なる威光の力で、大岩によるような一撃を加え、灰と化せしめた。」

この例でも明らかのように *tapas* と *tejas* と、*āsurutta* (忿怒) が並列して現われる。

また、*Viy.* 第7章10節には次のように述べられる²¹⁾。

kālodāi ! kuddhassa aṇagārassa teya-lessā nisaṭṭhā samāṇī, dūram gatā dūram nipatati, desaṃ gatā desaṃ nipatati, jaḥiṃ-jaḥiṃ ca ṇaṃ sā nipatati taḥiṃ-taḥiṃ ca ṇaṃ te acittā vi poggalā obhāsaṃti, ujjoveṃti, taveṃti, pabhāseṃti/

「*kālodāi* よ！怒った出家に放たれた *teyalessā* が、遠くに行って落下しようが、近くで落下しようが、落下した場所においては、生命のなくなった物質が輝く。」

ここでは *tejoleśyā* そのものが輝く訳ではないが、それが光照作用の原因であることは疑いない。ここで使用されている「光輝」を表わす動詞は *obhāsaṃti* 以下の4語であり、II, III 章においても、*leśyā* と連合していた。これは原論文の *tapas*, *tejas* が「光輝」の動詞と連合する事実に対応する。このように *tejoleśyā* も他の *leśyā* と同様「光輝」の意味を包含することは明白である。

tejoleśyā は *tejas* と同じく「光輝」を意味することは疑いないが、この語を分析すると、*tejas* と *leśyā* は、共に、既にIII章冒頭で考察した「光輝」を表わす6語の中に含まれていた。両者とも「光輝」を表わすことから、また上述の個所で同義語として並列して用いられていることから、*tejoleśyā* は、*tejas* に同義語 *leśyā* を重複させて作られた複合語であるとの可能性は否定できないであろう²²⁾。むしろ、このように考えることは、*tejoleśyā* と *tejas* が交替可能な同義語として登場してくる理由としても合理的である。

以上のように *tejoleśyā* は「光輝」の性格をもつことが明らかになる。ここに登場する特殊な神秘力は苦行に由来するもので、これら、「光輝」「苦行」との関連は、上述の原論文との対照においてますます確実なものになった。原論文の古典文献に対し、当該の耆那教経典という時代的、領域的な差異が認められるが、上で検討したように、両者の一致は偶然によるとするにはあまりに類似しすぎている。ゆえに、これらの *tapas* と *tejas* の観念連合は、古代インドにおいて、普遍的に認められていた可能性は否定できないように思われる。

「Gosāla よ、穀のついた一握りの kummāsa (skt. kurmāsa 「黒豆の一種」) と一杯の水で、不断の chaṭṭhamchaṭṭha (三日毎に中休みのある断食) という苦行を続け、両腕を高く掲げたりしつつ (中略) 過す、このような人こそが、六ヶ月の後に、威力のある teyalessā を貯えた人になる。¹⁵⁾」

このように teyalessa は、特殊な苦行によって身体に貯えられることが分かる。

Viy. 第15章で用られる teyalessā は上述の2例のみである。これら以外の個所では、teyalessā は teya によって悉く代用されている。上述の苦行者によって Gosāla の身体に teyalessā が放たれる場面は Mahāvira によって説明されるが、この個所の前に同じ場面が客観的に説明されている。そこでは、上述の下線部は、「gosālassa maṃkhaliputtassa vahāe sariragaṃsi teyaṃ nisirai 「Gosāla Maṃkhaliputta を殺すために身体に teya を放った。」と表現される。このように同一内容が teyalessā と teya の両語で表現されており、teya は teyalessa に他ならないことは明白である。

この teya(tejas)は、度々、tava (tapas) なる語と連合する¹⁶⁾。Gosāla は、その後、Mahāvira と別れ、敵対するようになり、終には彼に対し攻撃を加える。それは次のように描写される。

「(前略) このように Gosāla Maṃkhaliputta の苦行力(tava, skt. tapas) という威光 (tea, skt. tejas) が、沙門尊者 Mahāvira を殺すために身体に放たれたが、そこで二進も三進もゆかず、右往左往した。右旋回しだして廻り続けた。ついに、上方の虚空へ昇り、そこからきびすを返して戻って来て、Gosāla Maṃkhaliputta の身体を焼いてその中に侵入した。」

この下線部は

evāmeva gosālassa vi maṃkhaliputtassa tave tee samaṇassa bhagavao mahāviraṃsa vahāe sariragaṃsi nisitṭhe samāṇe と表現される。

このような tava と tea の連合は、語法上、上述の teya (tejas) だけの場合も、teyalessā (tejolesyā) 場合も変りない。Jozef Deleu や, Basham も, “magic fire” や “magic heat” として、tejas に重点をおいて訳すのみで tapas との連合は考慮していない¹⁷⁾。上述の samkhittaviulateyalessa の説明にもあったように teyalessā すなわち teya (tejas) は苦行によって蓄積されるものである。したがって、tava (tapas) は苦行の結果得た苦行の力を指し、それが tejas のことであると解釈されるようである。

ここでも見られる tapas と tejas の関係について、古典文献を考察した原実教授の研究がある。その著「古典インドの苦行」(春秋社, 1979年) 第2章第2節熱力の項では、熱力を意味する tapas について詳しい考察がなされている。tapas と tejas の関係について次のように述べられている。

「既述の如く、行者の内に蔵せられ、蓄積せられた tapas は屢々その外的顕現としての tejas の形を取るから、tapas はこの種の「光輝」の文脈に於いて tejas と連合して現われる。tapas と tejas の両者は謂わば、内的・精神的熱力と外的・物理的熱力の関係に立ち、後者は前者の現象形態となる。tejas それ自体は「力」「威力」の他に「威光」「光輝」を意味するから、これら光輝を現わす動詞 dip-, dyut- と連合するのは当然の勢いであるが、次下の文脈に現われる tejas は内に蓄えられた精神的熱力、tapas の外的顕現として理解されるべきである。¹⁸⁾」

以上の説明の後に、原教授は tapas と tejas の関係を踏まえて、tapas と「光輝」を表わす動詞の連合について考察しておられる。動詞 dah- との連合についての諸例から、tapas を具えた人は、怒りによってその対象を焼き尽くすことが可能であることが述べられる。この場合、怒りに

音声変化の規則からは、pkt. pamha > skt. padma はありえない。この矛盾を解消する鍵は、既に言及された paumapamhagora という語にある。paumapamhagora (skt. padmapakṣmagaura) は「蓮の雄しべのごとき黄色」であり、pamhalessā も黄色であった。しかし、後の skt. の綱要書やその注釈書では padmaleśyā は蓮の花の赤色を表わす。同一 Leśyā に、二様の色の解釈が生じることになる。この混同は、音声変化上認められない pamha > padma の比定に由来する。pamhalessā の pamha- は、paumapamha (-gora) の複合語の後分を採用したものであるが、skt. では、この複合語の前分を形成しより親しみの深い pauma すなわち padma を pamhalessā の skt. 形に充てた。従って、本来、「蓮の雄しべの黄色」であった pamhalessā が、padmaleśyā になると、「蓮（の花）」の色を表わす赤色に解釈されるようになった。このように考える以外には、pkt. pamha > skt. padma の誤った比定が現われた理由と、同一の leśyā を、黄色と赤色の二様に解釈するという矛盾を解消する術はない。

従って、pamhalessā の名称は、paumapamhagora に由来すると考える他はない。pamhalessā は、元来、色と Leśyā の対応関係に基いて名付けられたことが明らかになる。他の色と Leśyā に関しては、名称からこのような明瞭な対応関係を認めることはできない。しかし、pamhalessā についてこれ程明らかな対応関係が認められた以上、完璧ではないにしても、他の神々に認められた色と Leśyā の対応関係は、単に偶然の結果として看過されてならないと考えられる。

このように Leśyā と（神々の）身体の色との対応関係または同一視が認められた。本章冒頭で考察した Uva. 22 以下の神々についていわれる普通名詞 leśyā は「光輝」を意味し、同時に注釈家によって「身体の色」と説明された。身体の色は、tattatavaṇijjavanṇa, paumapamhagora, seya 等、単に色を表わす場合と共に、kanagattayarattābha, allamadhugavaṇṇābha, rattābha, kālamahāṇīlasariṇāguliagavalaayasikusumappagāsa 等のように ābhā, pagāsa (skt. prakāśa) 等の「光輝」を含む複合語によって具体的な色が表示される場合が目につく。この「光輝」こそが注釈家によって「身体の色」と説かれる普通名詞 leśyā と具体的な色で表わされた「身体の色」とを結びつける接点であろう。「身体の色」と術語の Leśyā との密接な関係が明らかになった今、「身体の色」を媒介として、術語 Leśyā は「光輝」を意味する普通名詞 leśyā と深く関連していることが予想されるが、この点については第 V 章で検討する。

IV

第三番目の leśya の語法として teyalessā (tejoleśyā) がある。これは一種の神通力の発現形態であると考えられる。

具体的な teyalessā の用例を經典中に求めよう。Viyāhapaṇṇatti (Bhagavatisūtra のことである。以下 Viy. と略す。) 第15章 sū° 543 では、耆那教の第 24 番目の祖師 Mahāvira が、後に Ājīvika 教の祖師になる Gosāla Maṃkhaliputta と共同生活を送っていた頃の物語が述べられている。Mahāvira がその情景を説明する。

tae ṇaṃ se vesiyāyaṇe bālatavassī tumaṃ doccaṃ pi taccāṃ pi evaṃ vutte samāṇe asurutte jāva paccosakkai, 2 ttā tava vahāe sariragaṃsi teyalessaṃ nissirai/¹⁴⁾

「かの愚なる苦行者 Vesiyāyaṇa は、汝 (Gosāla) に再三再四このようにいわれて、怒って、(中略) 退いて、汝を殺すために、身体に teyalessā を放った。」

Mahāvira に救われた Gosāla は、彼に、どのようにすれば、teyalessā を（体内に）貯えた人 (saṃkhittaviulateyalessa, skt. saṃkṣiptavipulatejoleśya) になれるかを尋ねている。彼は次のように答える。

ある。) *vaimānika* 神達は次(引用詩節)のように入れ、まさに三色である。¹²⁾と説明した後に、上述の *Jiv. sū° 215* の色に関して *Malayagiri* がその注釈中に引用した詩節(別表、項目(3)にあたる。)と一字一句違いのない章句を引用している。この *Abhayadeva* の3色の解釈は、上述の考察からも適当であることは明白であり、これら3色は同時に *vemāṇiya* 神のもつ *Leśyā* の種類とも完全なる対応をなすことになる。

Uva. sū° 25 は、*joisiya* 神の諸特徴を述べている。その中で色を表わすと思われる語に、*tattatavaṇijjakaṇḍavaṇṇā* (skt. *taptatapaniyakanakavarṇa*) 「灼熱された *tapaniya* なる黄金の色をした」という表現がある。この色が何色かは、*Uva. 22* の *bhavanavāsin* の神々の諸特徴を述べた中で、舌の様子を説明した語に解答が求められる。それは、*huyavahaṇiddhamtadhoyatattatapanijjarattatalatālujiha* (skt. *hutavahnidhmātadhautataptatapaniyaraktatalatālujihva*) 「燃えさかる火によって、鑄られ、精練され、灼熱された *tapaniya* (なる黄金の) 赤い表面の舌皮をした」なる語で、これにより、*taptatapaniya* の色は *rakta* 「赤色」であることが明白になる。したがって、*joisiya* の神々の色も、赤色になる。この神々の色について他に説明する語は見当たらない。他方、*joisiya* は *teuessā* をもつことが知られる。このように、*joisiya* の神々の色と *Leśyā* は、共に赤色であることによって対応関係をもつことになる。

sū° 22 では *bhavanavāsin* の神々の色を表わす語に、*kālamahāṇīlasariṇāḷaguliagavala ayasikūsumappagāsa* (skt. *kālamahāṇīlasaḍṣāṇīlagulikātasikūsumaparakāśa*) が現われる。この語は、注釈家 *Abhayadeva* にしたがつと、「黒い宝石 (*mahānila* 「サファイヤ」) によく似た *nila* (宝石名) と藍玉 (*gulikā*) と水牛の角と *ataṣī* の花の輝きをした」という意味になり、全体として、「黒色をした」を意味すると説明される。この複合語をさらに分析すると次のように考えられる。*kāla* はとりもなおさず黒色を意味する。しかも、「水牛の角」は、*Utt. 第34章*と *Paṇḍavaṇāsutta 第17章*の *Leśyā* 章では、*kaṇhalessā* 「黒の *Leśyā*」の例に挙げられている。「*ataṣī* の花」は *Utt. 34-6* では、*kāulessā* 「灰色の *Leśyā*」の例として挙げられる。もちろん、*mahānila, nila* には「青」の語は含まれている。*Abhayadeva* はこの複合語を全体で黒色を表わすと説明したが、このように分析すると、この複合語には、黒と青と灰の三色が含まれていることになる。その構成要素の中、*gavala* と *ayasikūsuma* の二語は *Leśyā* の色を例示する時にも用いられている。他方、*Bhavanavāsin* の *Leśyā* は *kiṇha, nila, kāu, teu* (黒, 青, 灰, 赤色) の四種である。この複合語に含まれていると考えられる3色は、*Leśyā* の3種と対応することになる。ただ、「赤色」については何ら対応関係は見出されない。

以上のように考察してみると、*vemāṇiya* 神のみならず、*joisiya, bhavanavāsin* 等他の神々に関しても色と *Leśyā* の対応が認められる可能性が生じるように思われる。しかし、また、上述のように *bhavanavāsin* の *teuessā* に対応する色の説明はない。また、*vāmaṃtara* 神達については、色の説明はなく、*Leśyā* との対応も認められない。このように神々の色と *Leśyā* の間に完全な対応関係が認められる訳でなく、まして、他の *jiva* すべてについて同様の対応が認められることはない。では、完全ではないにしても *vemāṇiya* 以外に認められた両者の対応や、*Malayagiri* や *Abhayadeva* 等の注釈家によって完全に認められている上述の対応関係はどのように理解すればよいのだろうか。それは彼らの捏造にすぎなかったのだろうかという疑問が生じる。

この疑問を打ち消す有力な証拠が、*Leśyā* の一つである *pamhalessā* の語源の考察に関連して求められる。これについて、筆者は既に小論を發表したので、ここでは詳述を避け、必要な部分の大綱を紹介するに留める¹³⁾。

pkt. の *pamhalessā* の *pamha* は、*skt.* のあらゆる文献で *padma* に比定される。しかし、

は共に「黄色」である。(1)―(e)と(4)―(e)は完全な同一語が使用されている。(c)と(d)の神々について、(1)と(4)は対応関係にないのが問題として残る所であるが、(a)(b)(e)の明瞭な対応関係からみても、(1)と(4)は十分対応すると推定されるのである。

さらに、(1)に対する Malayagiri の注釈〔別表、項目(2)〕は、テキストの本文を無視して、(4)との対応を完全なものにしようと試みていることは、別表からも明白である。その根拠として、色に関する注釈部分の最後に、pkt. の詩節を引用している。〔別表、項目(3)〕

kaṇagattayarattābhā suravasabhā dosu hoṃti kappesu/
tisu hoṃti paṃhagorā teṇa paraṃ sukkillā devā//1//

〔(最初の) 2つの kalpa 天では、雄牛のごとき神々達は、黄金の肌のごとき赤い光沢をもち、(次の) 3つの kalpa 天では、(蓮の) 雄しべの黄色をしており、それ以上の神々は白色である。〕

また、同じ注釈の少し後に述べられる Leśyā に対する説明の最後に、やはり、この pkt. 詩節と対応する二詩節が挙げられている。〔別表、項目(5)〕

kiṇhānilākāuteūlesā ya bhavaṇavāṃtariyā/
joisaḥsohammisaṇa teulesā muṇeyavvā//1//
kappe saṇaṃkumāre māhiṃde ceva baṃbhaloe ya/
eesu paṃhalesā teṇa paraṃ sukkalessā u//2//

〔bhavaṇa (bhavanavāsin) と vaṃtariya (vyantara) の神々は、kiṇha, nila, kāu, teu (黒、青、灰、赤色) の leśyā をもつ。joisa (jyotiṣka) と sohamma (saudharma) と isaṇa (aiśāṇa) の神々は teulesā をもつと知られるべきである。//1//

saṇaṃkumāra, māhiṃda, baṃbhaloya の kappa (kalpa) 天では、(神々には) paṃhalesā がある。それ以上は, sukkalessā である。//2//〕

別表の項目(3)に対応するのは、sohamma 以下であるが、これらは完全に対応する。

以上のように注釈者達は神々の身体の色と Leśyā の対応を完全に認めており、経典にも部分的ではあるがその事実が知られる。耆那数の重要な綱要書 Tattvārthādhigamasūtra (以下 TS と略す) に対する注釈 (ṭikā) を書いた Siddhasenagani は TS 4, 2に「(神々の) 第3階級は黄色の Leśyā をもつ」といわれるのに対し、この Leśyā を「ここでは実体の Leśyā (dravyaleśyā) すなわち、身体の色 (śariravarṇa) であることが確定している。¹¹⁾」と説明する。このように、他の後代の注釈家によって、身体の色と Leśyā の同一視が認められていることが理解される。

以上で、leśyā あるいは Leśyā と身体の色との対応関係または同一視を、経典中に対照される章句の考察や、注釈者達の直接的な指摘によって検討してきた。既に leśyā に関して触れた Uva. 22—26は4階級すべての神々についての特徴を叙述している。それらの表現の中に、神々の色を表わしていると考えられる語が含まれる。これらには直接 Leśyā との対応は言及されていない。しかし、上述の考察からも、両者に対応関係が認められる可能性が非常に強いと考えられる。このような前提を踏まえてこの個所を考察する時、興味深い事実が浮かび上がってくる。

まず、Uva. 26 は第4階級の神々 vemāṇiya (vaimānika) 神達を扱っている。彼らの特徴を表現した語の中に次のような色を表わす三語が出現する。それらは、rattābhā paumapamhagorā seyā「赤い光沢をし、蓮の雄しべの黄色をし、白色をした、(vemāṇiya の神々は)」である。これに対し、注釈者 Abhayadeva は、

「“rattābha” とは赤色をした (lohitavarṇa) (という意味である。) “paumapamhagora” とは、蓮の萼の美しさをした黄色という意味である。“seya” とは、白色の (という意味で

しかも、ここに出現する *leśyā* は、前章で考察した天文学上の *leśyā* の場合と同じく、*ujjovemāṇā pabhāsemāṇā* という光輝を表わす動詞と連合している、ここに、この個所の *leśyā* も「光輝」を表わす語に他ならないことが確実になる。では、この *leśyā* が注釈者によりどうして「身体の色」と説明される必要があったのかという問題が疑問として残る。

耆那經典には、神々の身体の色と *leśyā* 説の術語である *Leśyā* が対応している例がみられる。*Jiv. sū° 213* 以下では第4階級の神々 *vemāṇiya* (skt. *vaimānika*) 神達が描写される。*sū° 215* では色について述べられる。

「sohamma (*saudharma*) 天や *isaṇa* (*aiśāṇa*) 天にある神々は、色についてどのように知られるか?」「Gotama よ! 色については、黄金の肌をした赤い光沢をもつと知られる。*saṇaṃkumāra* (*sanat-kumāra*) 天や *māhiṃda* (*mahendra*) 天の(神々は)、蓮の雄しべの黄色をしていると知られる。」「尊者よ! *bambhaloga* (*brahmaloka*) 天については(如何なるや?)」「しっとりとした蜂蜜の色の輝きをしていると知られる。*gavejja* (*graiveya*) 天に至るまで同様である。*aṇuttara* 天に生まれる(神々)は、色について純白と知られる。」

以下、同様に各天における神々について、芳香 (*gaṃdha*) 触感 (*phāsa*, skt. *sparsā*), 物質 (*poggala*, skt. *pudgala*) が説明された後、*Leśyā* が述べられる。

「sohamma 天や *isaṇa* 天の神々には何種の *Leśyā* が知られるのか?」「Gotama よ! *teuessā* の一種が知られる。*saṇaṃkumāra* と *māhiṃda* には *pamhalessā* が(知られる。) *bambhaloga* においても同様である。残りの諸天については *sukkalessā* が(知られる。) *aṇuttara* 天に生じる神々には) *paramasukkalessā* が(知られる。)」

この神々の色と *Leśyā* を表にあらわすと別表のようになる。(a)(b)(e)の神々の色(1)と *Leśyā* (4)を対照すると両者には明らかな対応が認められる。(1)—(a)「黄金の肌のような光沢をした」と(4)—(a)の *teuessā* は、両者とも「赤色」を表わす。(1)—(b)「蓮の雄しべの黄色」と(4)—(b) *pamhalessā*

テキストの種類の 神々の天界の 名前	vemāṇiya 神の身体の色			vemāṇiya 神の <i>Leśyā</i>	
	(1) <i>Jiv. sū° 215</i>	(2) (1) に対する Malayagiri の注釈	(3) Malayagiri 注 中の引用詩節	(4) <i>Jiv. sū° 215</i> 注中の引用 詩節	(5) (4)の Malayagiri 注中の引用 詩節
(a) sohamma isaṇa	kaṇagattayarattābhā (赤)	kanakatvagraktābhā (赤)	kaṇagattayarattābhā (赤)	teuessā (赤)	teuessā (赤)
(b)saṇaṃkumāra māhiṃda	paumapamhagora (黄)	padmapakṣmagaura (黄)	pamhagora (黄)	pamhalessā (黄)	pamhalessā (黄)
(c) bambhaloga	allamadhugavaṇṇābhā (adramadhuka- varṇābhā)	padmapakṣmagaura (黄)	pamhagora (黄)	pamhalessā (黄)	pamhalessā (黄)
(d) laṃtaga } gavejja }	" }	śukla śuklatara śuklatama (純度を増す) ↓	sukkila } (白)	sukkalessā } (白)	sukkalessā } (白)
(e) aṇuttara	paramasukkillā (純白)	paramaśukla (純白)	sukkila (白)	parama- sukkalessā (純白)	sukkalessā (白)

(〃印は同上を表わす)

(leśyā) を覆って……」と説明する。以上から、leśyā はあくまで「光輝」を意味し、PSM (2)の訳語「輪盤」はそれから二次的に導かれたと考えて差支えないと思われる。

以上のように天文学に関する leśyā は「光輝」「光線」を意味することが結論づけられる。

III

次に「身体の色」と訳される leśyā の考察に移る。Uvavāiyasutta (以下 Uva. と略す) sū° 22—26 では、4階級に分類される神々が Mahāvira (耆那教の24番目の祖師)に敬礼する情景が述べられる。彼らの様々な特徴を表わす表現が現われる。その中で4階級のあらゆる神々に共通して次のような描写がなされる⁷⁾。

(1) divveṇaṃ vaṇṇeṇaṃ (2) divveṇaṃ gaṃdheṇaṃ (3) divveṇaṃ rūveṇaṃ (4) divveṇaṃ phāseṇaṃ (5) divveṇaṃ saṃghayaṇeṇaṃ (6) divveṇaṃ saṃṭhāṇeṇaṃ (7) divvāe iddhiḥ (8) divvāe juḥ (9) divvāe pabhāe (10) divvāe chāyāe (11) divvāe accīe (12) divveṇaṃ teṇaṃ (13) divvāe lesāe dasa disāo ujjovemāṇā pabhāsemāṇā……

「(1)神々しい色 (2)神々しい芳香, (3)神々しい姿, (4)神々しい触感, (5)神々しい骨格, (6)神々しい形態, (7)神々しい神通力, (8)神々しい dyuti,⁸⁾ (9)神々しい prabhā (10)神々しい chāyā, (11)神々しい arcis, (12)神々しい tejas (13)神々しい leśyā をもって十方を照らし(uddyotayanti), 輝かせ (prabhāsayanti) つつ, ……」

(1)から(7)までは各々特徴のある語が並んでいる。しかし、(8)から(13)までの6語は各々の特徴が曖昧である。これを明らかにする手掛りとして注釈の見解を参照する必要がある。Uva. に対しては Abhayadeva が注釈している(A)。Jivajivābhigamasutta (以下, Jiv. と略す)を注釈した Malayagiri は sū° 116 に対する注釈中で Uva. の上述の引用と同一文脈を引用し、それに注釈を加えている(B)。両注釈者にしたがうと上述6語の内容は以下のとおりである。(8)“ jui (skt. dyuti) ” に対しては具体的な説明はない。(9)“ pabhā (skt. prabhā) ” に対し、(A)は yānādidipti 「(神々の)乗物等の輝き」と説明し、(B)は bhavanāvāsagatā (prabhā) 「住処に存する(光輝)」と解説する。(10)“ chāyā ” に対し、(A)は, śobhā 「輝き」と、(B)は samudāyaśobhā 「集積した輝き」と説明する。(11)“ acci (skt. arcis) ” に対し、(A)は śarīrastharatnāditejojvālā 「身体に飾られた宝石等の光輝燦然」と、(B)は同様に svaśarīragataratnāditejojvālā 「自身の身体に飾られた宝石等の光輝燦然」と説明する。(12)“ tea (skt. tejas) ” に対し、(A)は śarīrasambandhirocis 「身体に関する光輝」と、(B)は śarīraprabhava 「身体の威力」と説明する。(13)“ lesā (skt. leśyā) ” に対し、(A)は dehavarṇa 「身体の色」と、(B)は dehavarṇasundaratā 「身体の色のおしき」と説明する。

これらの jui (skt. dyuti), pabhā (prabhā), chāyā, acci (arcis), tea (tejas), lesā (leśyā) の6語には、Pkt.-Eng. 辞典や Skt.-Eng. 辞典を参照する時⁹⁾、いずれも light もしくは lustre の訳語が認められ、「光、光輝」の意味を有することは明白である。上述の注釈者達の説明も、基本的には、この「光、光輝」という語義から少しも逸脱するものではない。むしろ、彼らが、これら「光、光輝」を表わす同義語の間に、何らかのニュアンスの違いを認めようとして腐心した結果、上述の様々な詳細な説明が加えられることになったと考えるのが自然であろう。事実、Abhayadeva は上述のような説明をした直後に、それと異った解釈として次のように説明する。

「または、dyuti 以下の諸語は同義語であり、光輝の優れていることを証明するためのものである。このような理由で、(これらの諸語には)同語反復(の誤り)はない。¹⁰⁾」

以上のことから、これら6語は同義語が並べられたもので、leśyā も「光輝」を表わす語であることに疑問の余地はなくなる。

II

まず、天文学上の *leśyā* について考察する。PSM (1)光輝と(3)光線には本質的な相違は存在しないので区別して考察する必要はないであろう。

耆那経典 *Sūriyapaṇṇatti* (以下 *Sūr.* と略す) 第16章では *leśyā* が「光輝」であることが明瞭に示されている。テキストには³⁾

tā caṃdalesādi ya dosiṇādi ya dosiṇāi ya caṃdalesādi ya ke aṭṭhe kiṃ lakkhaṇe? tā ekaṭṭhe egalakkhaṇe

「では、*caṃdalesā* 等と *dosiṇā* 等は、また、*dosiṇā* 等と *caṃdalesā* 等は、いかなる意味をもち、いかなる特徴をもつのか？ それらは同義であり、同じ特徴をもつ。」

と説かれる。*dosiṇā* (skt. *jyotsnā*) は「月光」を意味し、*caṃdalesā*(skt. *candraleśyā*)の *caṃda* は月を指すから、*leśyā* は当然、「光」「光輝」を意味することになる。同じことが、*ātava* (skt. *ātapa*「陽光」)と *sūraleśyā* (skt. *sūryaleśyā*「太陽の光」)について説明される。したがって、*leśyā* が(太陽や月の)「光輝」を表わすことは明白である。

このような語法には次の例もあてはまる。*Sūr.* 第19章では、人間界の外部の太陽や月が、その光輝を説明する複合語で表わされている。

suhalesā maṃdalesā maṃdāyavalesā cittamaṃtalesā aṇṇoṇṇasamogaḍḍhāhiṃ lesāhiṃ kūḍā iva ṭhāṇaṭṭhitā te padese savvato samamṭā obhāseṃti ujjoṃeṃti taveṃti pabhāseṃti

「(人間界の領域外では、月、太陽、惑星、星座、星等の姿をした神々は)快美な光をし、冷たい光をし、温和な光をし、穏やかな熱さの光をもち、様々に混り合った光をもち、山峰のごとく定置に位置し、相互に浸透しあった光によって周囲の微点をことごとく照らす。⁴⁾」

ここに現われる *leśyā* は、注釈者 *Malayagiri* の *prakāsarūpa*「光輝のようなもの」又は、*raśmisamghāta*「光線の束」という説明を待つまでもなく、「光輝」「光線」を意味することは明らかである。ここで重要なのは、光輝を意味する *leśyā* によって周囲の微点を照らすという個所で、*leśyā* と連合して、「光輝」を表わす *obhāseṃti ujjoṃeṃti taveṃti pabhāseṃti* (skt. *avabhāsayanti uddyotayanti tāpayanti prakāsayanti*) の4語の同義語が現われている事実である。これらは後述の他の語法の *leśyā* とも連合して登場し、本稿の主題である *leśyā* の諸語法間の関連の考察にとっては重要な鍵となる。

PSM (2) の(日輪や月輪の)輪盤 (*maṇḍala, bimba*) は、発光源であるから光輝の性格をもつことは自明であるが、注釈にしたがうと、むしろ光輝を意味する *leśyā* の特殊な場合が輪盤であることに、この訳語の由来が見出される。

Sūr. 第20章は日蝕と月蝕とを扱っている。

「これらの15の無欠なる物質が常に月や太陽の(輪盤上の)光輝に随伴する時、人間界において人々は、『このように、*Rāhu* (蝕を起こす惑星)は、月や太陽を捕えた(欠けさせた。)]という。⁵⁾」

Malayagiri は下線部 *lesāṇubaddhacāriṇo* を、*candrasūryabimbagaṭṭhaprahānucāriṇo*「月や太陽の輪盤上の光輝に随伴する(もの)」と説明する。ここでは *leśyā* は(輪盤上の)光輝とみなされている。*Samavāyāṅga*⁶⁾ 第14章で月蝕を起こす *Rāhu* (*dhuvarāhu*) が月の *leśyā* を覆うことが述べられる。この *leśyā* に対し、*Abhayadeva* は、*leśyā—diptis tatkāraṇatvāt maṇḍalam leśyā tām āvṛtya*…「*leśyā* とは光輝であり、その原因であるから輪盤も *leśyā* である。その

Leśyā の語義について

—— 光輝としての Leśyā ——

土 橋 恭 秀

I

Leśyā は靈魂 (jīva) の道徳的品位を 6 種の色彩名で表わしたものである。これは Ājivika の 6 類 (Abhijāti) 説を借用し、耆那教の karma (業) 論の潤色を受けて瑣屑な教義体系を形成するに至ったと認められる。他教義を自派の教義体系に編入するにあたっては、自派の教義として統一をとるため何らかの方策が企てられ、同時に不明な点を生起したことは想像に難くない。

すでに、leśyā なる語自体についてこの印象は免れるべくもない。この語の語源に関しては諸説が存在する。W. Schubring はこの語を lesā (微粒子) に関連させるが語源については不明とする。H. Jacobi 等は kleśa に求め、注釈者達は liśyate すなわち śliśyate に求めている。いずれも業論と関連づけ、術語としての leśyā の側面から考察している¹⁾。

一方、Schubring はこの見解を示した後、この語に対応する女性名詞として “chāyā” 「光輝、輝き、色」を挙げ、これは Leśyā の非術語的語義であると説明する。J. Deleu は同一語で異った意味を表わす例として、lessā (leśyā の pkt. 形) “light” と teyalessā (tejoleśyā の pkt. 形) “the fiery spiritual hue” を挙げている²⁾。このように leśyā は様々な意味を含むことが分かる。Schubring は特殊な術語の中に非術語的な意味を認め、Deleu は異った語義の間に何ら関連を認めていない。しかし、前者については、その説とは反対に、非術語的すなわち一般的な語義から特殊な術語が導き出されるのが合理的であるという反論が予想される。後者についても、同一語に異った派生が認められていない以上、両者に関連がないとするのは不自然である。ここに、術語としての Leśyā とそれ以外の用法の leśyā との関係が注目される。本稿では、leśyā の様々の用例を検討して、それらの間に関連性が認められないかを考察する。これこそが、術語の Leśyā の性格を明らかにする不可欠な方法であると信じるからである。

Prakrit-Hindi 辞典 Pāiasaddamaṅḡavo (以下 PSM と略す) では、lesā (=lessā) には 6 項目の訳語が与えられている。それらは以下のごとくである。(1)光輝、(2)(太陽、月等の)輪盤、(3)光線、(4)身体の美しさ、(5)靈魂の特殊な変化、(6)靈魂の清浄、不浄の変化が起る原因となる黒等の実体。本稿第 II 章では天文学の分野に属する PSM (1)(2)(3)の leśyā を扱う。第 III 章では PSM(4)を考察する。第 IV 章では PSM に挙げられないが、特殊な術語 teyalessā なる複合語中の lessā を扱う。第 V 章では所謂 leśyā 説の術語としての Leśyā を検討する。これは PSM の(5)(6)にあたる。

なお、本稿では leśyā 説として業論に関するものとして知られる術語 leśyā を Leśyā と表示し、他の一般的用語の leśyā と区別する。